
発達理論の学び舎

Back Number: Vol 9

Website: 「[発達理論の学び舎](#)」



目次

- 161.あらゆる発達領域に通底する「普遍的な発達空間」の存在
- 162.発達の論理 (developmental logic) : ボールドウィン&ピアジェ&ワーナーの観点より
- 163.ローレンス・コールバーグからカート・フィッシャーへと受け継がれる思想: 多様な知性領域に存在する領域全般型の特性
- 164.言葉で成長支援を行う者に求められる最低限の資質: 「言語が持つ破壊・殺傷力」
- 165.「領域全般型」の測定手法の誕生: マイケル・コモنزの階層的複雑性理論
- 166.記事157から165までのまとめ: 測定手法と理論モデルの差異
- 167.多様な知性領域の差異化方法: ウィルバー&ガードナー&フィッシャーの比較
- 168.歪な成長・発達プロジェクトに邁進する私たち
- 169.「涅槃的誤謬」: 発達理論を活用した人材開発や組織開発に見られる認識上の過ち
- 170.学んでも成長しない人に共通する「誇示的学習 (conspicuous learning)」
- 171.読者の方から寄せられた質問事項 (No.1) : 「欲求や願望」と「価値観」の違いとは?
- 172.読者の方から寄せられた質問事項 (No.2) : 室積さんの問いかけの裏側
- 173.読者の方から寄せられた質問事項 (No.3) : 成長の必要条件と十分条件
- 174.意識の高度化が孕む危険性: 「心的位置エネルギー」の増加に伴う暴力
- 175.ハーバード学派とフランクフルト学派の発達思想: 甘い香りと苦い味
- 176.二重の虚構構造によって縛られている現代の日本語空間
- 177.欲求の多様化と自己実現なるものについて
- 178.道徳的知性発達論者としてのアダム・スミス
- 179.貨幣崇拜と成長崇拜
- 180.読者の方から寄せられた質問事項 (No.4) : 「曖昧なものの受容」について

161. あらゆる発達領域に通底する「普遍的な発達空間」の存在

『記事160.意識の特性と「サイコグラフ」について』では、人間の意識が持つ様々な特性と、多様な知性領域を描写する「サイコグラフ」について紹介しました。今回の記事は、意識の高度分析についてさらに踏み込んだ解説をしていきます。

発達理論の領域を俯瞰的に眺めてみると、無数の理論的枠組みが存在しています。それらの発達理論は、どれも明らかに固有の発達領域について説明しています。そこで問題となるのは、それら多様な発達理論を統一するような大きな絵を描くことは可能か？ということです。

つまり、多様な発達理論固有の差異を尊重しながら、それらを統合するような共通性を見出すことはできるのか？ということが論点になります。さらに、それらの多様性を包摂するような思考の抽象化は可能でしょうか？

これらの問いに答える際に鍵を握るのは、ケン・ウィルバーが“Integral Psychology (2000, 邦訳なし)”の中で述べているように、すべての発達モデルは暗黙的に一つの共通する発達空間を指し示しているということです。

ウィルバーのこの指摘は、私たちに示唆を与えてくれます。どういうことかということ、多くの発達領域は共通する一つの発達空間を通過する、あるいは一つの普遍的な発達特性を持ち合わせているということです。

ウィルバーは“Integral Spirituality (2006)”でまさにこの点を指摘しているのです。ウィルバーの主張を要約すると、無数の発達領域は確かに異質のものであるが、それらの領域を隣り合わせに並べてみると、すべての発達領域が同一方向に進化を遂げている、という考え方です。

より具体的には、すべての発達領域が複雑性・抽象性の増加の方向に発達していくということです。ここでウィルバーも「すべての発達領域の高度を測定するような一つの共通の物差しは存在するのか？」という問いを自身に投げかけています。実際にこの問いは、多くの発達論者を長年にわたって悩ませていた問題でした。

この問いに対して二つの説明論理があります。一つは、多くの発達論者が認めているように、共通の物差しを認知的発達ラインに置くという考え方です。この考え方は、意識を司る認知的発達ラインは他のすべての知性領域と関連するという論拠に基づいて生まれました。

もちろん、発達研究が示しているように、認知的発達ラインの成長は他の発達ラインの成長に必要ではありますが、十分ではないということに注意が必要です。

もう一つの説明論理は、上記で指摘したように、すべての発達領域には共通する進化の方向性が存在するというものです。すべての発達領域は複雑性の増加とともに発達を遂げていきます。イメージとしては、人間と植物は別個の生物種ですが、どちらも新たな生命体として生まれてくるためには、「種」の段階を経て「個体」の段階に至るといった共通のプロセスが必要になります。

特に二つ目の説明論理をもとにすれば、あらゆる知性領域の発達を測定する共通した物差しを開発できる可能性が浮上します。ウィルバーが多様な哲学思想や発達理論を一般化して一つの統一理論を構築したように、現存する多様な発達測定システムを一つの統一的なシステムにまとめ上げることが可能になります。

もし一つの共通した物差しがあれば、私たちは異なる発達モデルや測定手法を統一された一つの発達空間において定義することが可能となります。しかし、原理的にすべての知性領域に共通する性質を抽出することは極めて困難です。

せいぜい可能なのは、共通する性質のうち測定可能なものだけを選び出すことです。まさにこうしたことを可能にしたのが、私が一時期在籍していたマサチューセッツ州にあるLecticaが提供しているLASと呼ばれる測定システムなのです。

すべての知性領域において言語で表出される共通した発達プロセスに焦点を当てることによって、LASはあらゆる知性領域の発達測定を行う共通した物差しとしての役割を果たすことが可能です。

しかしながら、そうしたモデルを提唱する前に、理論的に幾つかの課題が存在します。ウィルバーが指摘しているように、ある知性領域の発達レベルをそのまま他の知性領域の発達に転用することはできません。

例えば、道徳的知性に含まれる「前慣習的」「慣習的」「後慣習的」という三つの発達段階を単純に認知の発達を説明する際に用いることはできないということです。なぜなら、後形式的操作段階の認知的発達レベルには、上記三つの道徳的知性の発達レベルが含まれ得るからです。

要するに、認知的な知性が後形式的操作段階であったとしても、前慣習的な道徳的知性を持っている可能性もあれば、慣習的、あるいは後慣習的な道徳的知性を持っている可能性もあるのです。

多くの発達心理学者は認知の知性領域を発達の共通尺度にしようとしていましたが、これは認知的な発達領域を絶対化する問題を孕んでおり、知性の段階は固有の発達領域において生じる現象である、というウィルバーの主張とも相容れません。

それでは、どのようにしたら認知的な発達領域を絶対化することを避け、共通の物差しを開発することが可能になるのでしょうか？LASは見事にこの問題を解決し、あらゆる知性領域を測定する共通の物差しを開発することに成功しているので、次回の記事でその誕生背景を見ていきましょう。

162. 発達の論理 (developmental logic) : ボールドウィン & ピアジェ & ワーナーの観点より

『記事161. あらゆる発達領域に通底する「普遍的な発達空間」の存在』の続き

領域特定型と領域全般型の発達段階モデルについて議論をする際に、まずジェームズ・マーク・ボールドウィンの功績を見ていく必要があります。ボールドウィンの理論は多くの心理学者にそれほど注目されていたわけではありません。

しかし、彼は人間の意識発達に関する重要な事柄をいくつも提唱しており、中でも重要なことは、人間が持つ多数な知性領域は独立した思考形態(モード)であり、それらは普遍的な成長過程を持つというものです。

また、ボールドウィンは、それらの多数の異なる知性領域を認識論的に「コントロール係数」という言葉で定義付けています。一言で述べると、コントロール係数というのは、私たちの思考と物理的・社会的な世界を結びつけるものを指します。例えば、認知的・科学的な思考形態は物質的な現実世界と結びつき、社会的・倫理的な思考形態は社会的な現実世界と結びつきます。

そして、こうした様々な思考形態が持つ普遍的な成長プロセスは「発達の論理 (developmental logic)」と呼ばれます。発達の論理を簡潔に述べると、どの思考形態も差異性・統合性・複雑性・抽象性の増加を経て発達していきます。

ここで大切なことは、思考形態は対象とする知性領域を表すのに対し、発達段階というのは本来、ある知性領域の成長プロセスに現れる普遍的な特性(例えば、複雑性や抽象性の増加など)のことを指すということです。

ジャン・ピアジェはボールドウィンから学びを得ていたため、若干の違いはあるものの、ボールドウィンとほとんど同様の理論モデルを提唱していました。つまり、ピアジェもすべての発達プロセスに共通する一つの構造特性を提唱していたのです。

しかし、ピアジェが真に意図していたことが正しく理解されていないがために、多くの発達理論のテキストにおいて、ピアジェの理論モデルは「ライン絶対主義」の最たる例であるとみなされています。ピアジェの原典を読み込んでいくと、彼の主張は、私たちが思っている以上により洗練されたものだったことに気づきます。

後年において、ピアジェは発達プロセスが階層性の増加を伴った統合化の過程であると見抜いていたのです。階層的な統合化というのは、発達プロセスの普遍的な特質であり、まさにそれは差異性・統合性・複雑性・抽象性の増加という観点から特徴付けられます。

階層的統合化という発想のおかげで、ピアジェは無数の知性領域におけるマイクロな発達を示す実証データから様々な洞察を得ていきました。その最たる例は、一貫した発達の構造的パターンです。発達の構造的パターンに沿って、ピアジェは有名な段階モデルを提唱したのだと言えます。

ピアジェと時を同じくして、ハインツ・ワーナーは同様の現象を発見しました。ワーナーは、ボードウインの言葉で言うところの「発達の論理」と重なるような発達原理を発見しました。ワーナーが述べている発達原理とは、発達は差異化が欠如した状態から徐々に差異性が増し、階層的な統合化を果たすというものです。これはまさにピアジェやボードウインが述べていることと重なります。

163. ローレンス・コールバーグからカート・フィッシャーへと受け継がれる思想: 多様な知性領域に存在する領域全般型の特性

『記事162. 発達の論理 (developmental logic) : ボールドウイン & ピアジェ & ワーナーの観点より』では、ボードウイン、ピアジェ、ワーナーの功績に焦点を当てながら、発達の論理について紹介しました。それら三人の発達理論の大家から時を経て、ローレンス・コールバーグは彼らの功績を一つにまとめ上げました。

コールバーグは様々な発達理論を一つに体系化し、認知的発達段階を探究する際には三つの分析的なレンズを用いる必要があると述べています。一つ目は経験される事物の普遍的な特性を分析すること、二つ目はそうした経験を表す概念の抽象性を分析すること、三つ目はインプットされる経験とアウトプットされる行動の構造的関係性を分析することです。

コールバーグが指摘する三つの点は、ボードウインが提唱したことで非常に似ています。ボードウインも思考の対象(一つ目)を分析する重要性を指摘し、思考の対象が実際の行動にどのように影響を与えるか(三つ目)は、概念の抽象性度合いと相対的に異なるものであると述べています

例えば、コールバーグはモラルの発達段階にこの考え方を採用し、モラルの知性を発揮する能力は物理的な世界を探究する能力と異なると述べています。つまり、それらは異なる世界を対象とした知性であり、それゆえに異なる行動を組成することになります。

しかしながら、理解を難しくしてしまうのは、それら二つの領域に共通する概念の成長プロセスが存在するという事です。実際のところ、コールバーグは多様な知性領域に存在する領域全般型の特性に気づいていましたが、それを深く取り上げることはありませんでした。

その探求を推し進めたのが、ハーバード大学でコールバーグに師事していたカート・フィッシャーです。フィッシャーは、脳科学、ダイナミックシステムアプローチ、動物行動学の知見に基づいて「ダイナミックスキル理論(dynamic skill theory)」を提唱し、これまでの構成主義的発達論者が成しえなかった発達領域全般に存在する共通の性質を解明しました。

その原型は1980年に出版された論文“A Theory of Cognitive Development: The Control and Construction of Hierarchies of Skills”に掲載されており、フィッシャーは、多様な知性領域で発揮されるスキルの階層的構造はある一定の構造的パターンを持って成長していくことを明らかにしました。LecticaのLASという発達測定モデルは、まさにフィッシャーの業績を直接的・明示的に採用しているので、もう少しフィッシャーの功績について紹介したいと思います。

最初に、ダイナミックスキルという概念そのものが領域全般型なものであると捉えてください。この点において、多様な知性領域は関連する認知スキルの集積体であるとみなすことができます。

例えば、道徳的知性の領域は、視点取得能力や文脈を把握する力など、関連する幾つもの認知スキルを持っています。それゆえに、直面する文脈の数に応じて、さらには与えられるタスクの種類に応じて同じ数の認知スキルが存在することを指摘しながら、スキル理論はそうした認知能力を精緻に細分化していきます。

与えられる課題が異なれば要求されるものも異なるため、私たちの認知スキルは一つの領域に固有のものだと言えます。さらに、認知スキルは状況に左右されるという「文脈依存性」を持っているため、ある状況における課題を解決することができるからといって、それが異なる状況における別の課題を解決できるとは限りません。

そのため、イメージは梯子ではなく、網の目なのです。私たちには多種多様な認知スキルが備わっており、それらは別々の速度で進化・成長していきます。私たちの認知スキルにはこうした多様性が備わっていますが、すべてのスキルは構築されなければならないという点は共通しています。

つまり、私たちの認知スキルは無から生じるものではないのです。それらは差異化・統合化のプロセスを通じて構築されるものであり、その成長プロセスは抽象性と複雑性の度合いが増していく現象なのです。

この観点は、知性発達という現象をどのように分析し、どのように理解したらいいのかという洞察を与えてくれるでしょう。ボールドウィンという言葉借りれば、各々の認知スキルは認知内容を規定する「コントロール係数(記事162を参照)」によって特徴付けられており、スキルの発達は発達現象の根底に存在する共通の発達特性に裏付けられているのです。

結論として、私たちの認知スキルがいかに異なっていようと、それらは差異化と統合化のプロセスを通じて構築されるものであるということに変わりはありません。

【追記:カート・フィッシャーの傑作論文】

東京は本日も雨ですね。米国生活最後の1年間は南カリフォルニアで生活をしており、日中に雨が降っているのを見たのは数回程度でした。一時帰国中の現在、日本では数十回以上雨を見ており、南カリフォルニアの5年から10年分ぐらいの雨の恵みを感じさせてもらっています・・・。

さて、本文中で言及した1980年に出版されたカート・フィッシャーの論文“A Theory of Cognitive Development: The Control and Construction of Hierarchies of Skills”は極めて優れた傑作だと言えます。フィッシャーのダイナミックスキル理論の原型である「スキル理論」について発展学習を望まれる方は、ぜひ上記の論文に目を通していただければと思います。フィッシャーは37歳(現在72歳でハーバード大学を退職)の時にこの論文を執筆し、「Psychological Review」という心理学の世界において最も権威ある専門誌に採択された論文です。

164.言葉で成長支援を行う者に求められる最低限の資質:「言語が持つ破壊・殺傷力」

「自分を愛せぬ者は、自分以外の者を愛することなどできない」エーリッヒ・フロム

冒頭、ドイツの哲学者・社会心理学者であるエーリッヒ・フロムの言葉から、発達支援を行うコーチやセラピスト、あるいは、より広範に人材育成に携わる者に求められる、ある資質を連想しました。

言葉を用いて他者の心の成長・発達を支援するコーチやセラピストなどは、他者の心を打ち壊せるだけの言葉の破壊力を携えていなければ、他者の心の成長を促すことなど決してできないのではないか、ということです。

人間の心の成長は、死と再生のプロセスによく喩えられます。別の表現を用いると、それは「破壊と創造のプロセス」であると言えるでしょう。つまり、人間の心が成長する際には、「死」や「破壊」という現象を避けて通ることができないのです。

私たちの心が成長するプロセスには、必ずある段階の死が訪れ、私たちの自己は再構成されながら新たな段階を構築していきます。こうした発達の根本原理を考慮してみると、他者を言葉で葬り去る力と再生させる力という対極的な二つの力がともに大切なものである、ということに気づくでしょう。

もし仮にコーチやセラピストの中に他者の心を破壊できるほどの言語力がなければ、どのようにして他者の心を再創造できるのでしょうか。破壊(destruction)と再構成(reconstruction)は表裏一体であり、何も破壊できぬ者に何も再構成することなど土台無理な話ではないでしょうか。

私たちの言葉というのは、本来的・本質的には呪術性に満ち溢れたものであり、途轍もない殺傷力を秘めたものなのです。しかし、現代社会で使用されている言葉は、そうした呪術性や殺傷力を限りなく削ぎ落とされ、骨抜きになっている気がしてなりません。その結果として、実に味気なく、弱々しい言葉が浮遊している状況に陥っているのではないのでしょうか。

日本語の言語力がどんどん地盤沈下する現代社会の世相を反映してか、コーチングや人材育成の領域において、様々な理論や方法を用いれば、さも人間の成長・発達が促されるかのような蠱惑的な思想が流布しているように思います(「流布」というよりも、根強く息づいているといったほうが正確かもしれませんが)。

畢竟、コーチやセラピストのように言葉で人を支援する者には、言葉で相手の心を崩壊させるだけの、あるいは相手の心を殺せるだけの言語力が必要なのではないのでしょうか。そうした力のない人間に言語を通じて人を成長させることなど微塵もできないように思われます。

ここでは、相手の心を破壊・殺傷できるだけの力を行使せよと言っているわけではありません。言葉を用いて他者の成長・発達を促す者には、最低限、そうした力を持っておくべきだと言っているのです。

侍は常に刀を抜く必要はないのです。しかし、侍は常に研ぎ澄まされた刀を持っておくべきではないでしょうか。

【追記】

追記として言及するまでもないと思うのですが、上記で述べている言語の破壊・殺傷力というのは、「罵倒」「暴言」などが表す言葉の暴力のことを指しているわけではありません。

言語の呪術性や言語が持つリアリティ構築作用などを用いて、他者の世界認識方法や意味構築装置を一変させてしまうような力のことを指しています。

165. 「領域全般型」の測定手法の誕生: マイケル・コモنزの階層的複雑性理論

『記事163. ローレンス・コールバーグからカート・フィッシャーへと受け継がれる思想: 多様な知性領域に存在する領域全般型の特性』では、ローレンス・コールバーグからカート・フィッシャーに受け継がれた発達思想である「領域全般型の発達特性」について紹介しました。

実はフィッシャー以外にも、ハーバード大学医学部精神科のマイケル・コモنزは、認知能力に存在する領域全般型の特性である「階層的複雑性」という概念を提唱しています。

コモنزも私たちの認知能力は、複雑性・抽象性・差異性・統合性が増す方向に進化していくという特徴を発見しています。階層的複雑性という概念は、まさに認知能力の構造的なレベルを指し示しています。

フィッシャーと同様に、コモنزは「タスク分析」に着目し、認知能力の階層的構造は特定のタスクを与えることによって顕在化されると述べています。例えば、「雨が降れば傘を持って行こう」というよう

な発話構造を生み出す条件的・仮説的な認知タスクは、「雨が降っている」というような単純な発話構造を生み出す認知タスクよりも階層的に複雑です。

これはなぜなら、前者の発話構造レベルは後者のそれを包摂しているからです。つまり、ジャン・ピアジェやハインツ・ワーナーが指摘しているように、条件的・仮説的な言語表現は直線的な言語表現を階層的に含んでいるのです。

こうしたプロセスはまさに、高次元の認知タスクで要求されているものは、低次元の要求事項を「含んで超える」ということを示しています。与えられるタスクの要求事項を分析することによって、どれほど多くのサブスキルが包摂され、超越されているのかを理解することが可能になります。

フィッシャーのスキル理論やコモنزの階層的複雑性理論で見られるこの種の分析は、特定の認知スキルの発達構造とそのプロセスを精緻に測定することを可能にしてくれます。認知スキル構造が持つ階層的な複雑性に着目することによって、認知スキルの種類に関わらず、いかなる種類の認知スキルの成長プロセスでも分析することができます。

つまり、認知スキルが持っている領域全般的な発達特性に焦点を当てるがゆえに、あらゆる知性領域の中で発露される認知スキルの階層的な複雑性を明らかにすることができるのです。実際にフィッシャーは、この分析手法を用いて、数学的知性、自己認識力、認識論的推論能力、道徳的推論能力など様々な認知スキルの成長プロセスを分析しています。

さらに、フィッシャーは文脈や与えられるタスクの種類を変えることによって、同一領域内におけるスキルレベルの差異も明らかにしています。フィッシャーの研究を初めとして、数多くの実証研究の集積によって、領域全般型の知性測定手法が生み出されることになったのです。

【追記: ハワード・ガードナーとケン・ウィルバーの主著再読】

この数日間、ハーバード大学教育大学院教授ハワード・ガードナーの“The Mind’s New Science: A History of the Cognitive Revolution (1985)”とケン・ウィルバーの“Up From Eden: A Transpersonal View of Human Evolution (1981)”を読み返しています。

前者は今から30年前に書かれたものであり、後者は約35年前に書かれたものです。

実のところ、多重知性理論を始めとするガードナーの功績には敬意を表していたのですが、近年のガードナーに対して、認知的発達心理学者としての研究活動にはそれほど従事していないのではないかと、という印象を持っていたため、彼の書籍を丹念に読むということをこれまでしていませんでした。

さらに、ジョン・エフ・ケネディ大学を卒業してからのこの2年間は、ケン・ウィルバーの思想とも意識的・無意識的に距離を取っていました。しかし、改めて上述したガードナーとウィルバーの書籍を読んでみると、中身の充実ぶりには目を見張るものがあります。

ガードナーの書籍に対しては、認知的発達心理学の誕生史をここまで幅広く多角的に調査したのかということに驚かされ、ウィルバーの書籍に対しては、人類が初めて登場した時代から現在に至るまでの人類全体の意識の発達を論じるというスケールの大きな試みに改めて驚かされました。

166. 記事157から165までのまとめ:測定手法と理論モデルの差異

それでは、ここで一旦これまでの記事「157-165(164を除く)」をまとめたいと思います。これまでのところ、「発達の高度」という概念を明瞭にするために、構造的発達理論の歴史において鍵を握る幾つかの概念を見てきました。

ケン・ウィルバーが提唱しているように、多種多様な知性領域を一つの共通な尺度で測定することが可能でありながら、それらは依然として「りんごとオレンジ」のような差異を持つことにも注意が必要です。

この考え方に最初に到達した人物は、発達心理学の始祖であるジェームズ・マーク・ボールドウィンです。発達理論の歴史的展開を俯瞰的に眺めると、この考え方はボールドウィンから始まり、ジャン・ピアジェ、ハインツ・ワーナー、ローレンス・コールバーグ、そしてカート・フィッシャーへと連綿と受け継がれていきました。

こうした歴史的展開の末、タスクの種類や文脈によって定義づけられる多様な認知能力を、発達構造が持つ共通の特性に基づいて一つの尺度で測定することが可能となりました。まさにLecticaのLASという測定手法は、こうした共通の尺度を提示する測定モデルなのです。

測定手法と理論モデルの間には重要な区別が存在します。測定手法は、現象がどのようにモデル化されるかにかかわらず、その現象のある側面を正確に映し出すことができます。例えば、温度計が測定手法の好例です。温度計は、様々な物質が異なる化学的・物理的なプロセスによって熱を帯びていたとしても、そうした物資の温度を正確に測定できます。

私たちは、化学や物理の領域に存在する様々な理論モデルを使って、熱という現象を説明することができますが、温度計によって計られる同一の性質に基づいて熱を測定することが可能になるのです。LASはまさに温度計のようなものだと言えます。

すなわち、LASは発達という現象に潜む特定の性質を計測することができるのです。しかし、LASは理論モデルではないため、発達に内在するプロセスを説明することはできません(温度計は、ある物質がどのように熱を帯びたのかを説明できないのと同じです)。

それに対して、カート・フィッシャーのダイナミック・スキル理論は、そうしたプロセスを説明することができる理論モデルの一例です。理論モデルと測定手法は、相互に関連し合っている必要がありますが、両者を混同してはいけません。そうした混同は「ライン絶対主義(特定の能力領域を絶対化する思想傾向)」に陥る危険性があります。

それゆえに、領域全般型の発達モデルと領域全般型の測定手法は異なると言えます。ピアジェは、特定の理論モデル——例えば、「同化」、「調節」、「均衡」などという概念——を使いながら、全ての発達現象を説明しようと試みました。

このモデルはとりわけ論理・数学的な知性を対象としており、論理・数学的な知性とは関連しない領域の発達現象をこのモデルによって説明しようとするのは、ライン絶対主義に陥ることになります。しかし、測定手法は説明記述を伴わないので、一つの測定手法を拡張適用することは、理論モデルを拡張適用することよりも問題は小さいです。

今後詳しく見ていきますが、領域全般型のアセスメントシステムは、特定の発達領域を定義づけることによって理論モデルと測定手法を融合させます。こうした融合は、測定技術の適用を制限してしまいます。

一方、LASは極めて異なる分析戦略を採用しており、測定技術の適用可能性と有効性を高めることを可能にする領域全般的な概念——例えば、「階層的複雑性」など——を用いて発達現象を特徴づけていきます。さらに、このように理論モデルと測定手法を差異化することによって、ライン絶対主義に陥ることを防ぐことが可能になります。

167. 多様な知性領域の差異化方法:ウィルバー&ガードナー&フィッシャーの比較

記事『165.「領域全般型」の測定手法の誕生:マイケル・コモنزの階層的複雑性理論』の続き

それでは、LASを用いてどのように多様な知性領域を差異化していくかという点を見ていきましょう。ケン・ウィルバーは、多様な知性領域というものが「比較的独立して存在する」という主張をしています。

ウィルバーの主張では、多様な知性領域は各々の固有な問いに裏打ちされたものであると述べています。例えば、認知の領域であれば「私は何を認識しているか?」、道徳の領域であれば「私は何をすべきなのか?」という独自の問いです。

ある意味、ウィルバーはこうした問いによって多様な知性領域を差異化しているのです。概して、ウィルバーは多様な知性領域がいくつ存在するのかについて明確な言明を避けており、「知性領域は数十に渡る」という表現を好んで使用しています。

ウィルバーの知性ラインと同義なものとして、ハーバード大学教育大学院教授のハワード・ガードナーの「多重知性」が取り上げられます。ガードナーは、厳密な基準を用いながら八つの知性を定義しています。

ガードナーは、私たちの知性がどのように働くのかということを解明しようとしており、潜在的な情報処理能力は私たちの生活や文化に価値を創出するために働くべきであると主張しています。ウィル

バーの知性ラインと比較すると、ガードナーは認知のラインのみに焦点を当てていると言われてい
ます。

実際に、ガードナーは感情的な知性や道徳的な知性は存在しない、という少々極端なことを述べ
ていますが、認知的な八つの知性は道徳的な判断や感情のコントロールなどを扱うと指摘していま
す。さらに、各々の知性は、道徳的・感情的に発揮されうるものであるとも指摘しています。

カート・フィッシャーのダイナミック・スキル理論のアプローチは、ガードナーの差異化の手法よりもウィ
ルバーの方法に近いと言えます。スキル理論では、具体的なタスクや文脈に応じた数だけ知性領
域が存在するという前提を置いています。

しかしながら、個別個別のタスクは「スキル」とみなされ、スキルの集積体や階層構造を持つスキル
が存在することに注意が必要です。例えば、中絶について議論するときに発揮されるモラルの知性
を取り上げてみても、認知的知性や倫理的知性などの他の知性領域が要求されます。

つまり、より一般的なスキルはより具体的なスキルを包摂するということがわかります。それゆえに、
スキル分析をすれば、スキルの階層や集積体の存在が明らかになります。これはまさに、特定の認
知活動を様々なスキルに細分化することを目指したアプローチだと言えます。

それゆえに、多様な知性領域を分析するために、各領域に関するタスク(設問)を与え、多様な認
知スキルを差異化していきます。例えば、リーダーシップ能力に関する知性の測定を行う場合、リー
ダーシップに関わる様々なタスクとスキルを分類することから始めます。

企業社会を例にとると、経営戦略を策定する際には、当然ながら戦略的な思考能力が要求され、
戦略を実行に移す際には意思決定能力が要求されます。LASを活用することによって、これらのス
キルが測定可能となるのです。要するに、LASを用いると、同一の物差しで異なるスキルのレベルを
測定することが可能になります。

ウィルバーが提唱しているような、主要な問いに対応した一般的なサイコグラフに関心があれば、
能力ラインごとに測定を行うことは可能です。もちろん、能力ラインを構成するスキルを実証研究に

よって精緻化させていくことは必要ですが、ウィルバーが“Integral Spirituality (2006)”の中で取り上げている多様な能力ラインを測定することは十分可能です。

ただし、認知のラインを例にとってみても、それはあまりにも漠然としているため、認知のラインを構成するどんなスキルを測定したいのかをあらかじめ明確にしておく必要があります。そのため、最初に取り掛からなければならないのは、「認知」という曖昧な定義をより明瞭なものにするために、どんな能力を測定したいのかを明らかにし、その能力が浮かび上がるタスク(設問)を設定することで

す。

ウィルバーの理論では、認知のラインは「私は何を認識しているのか?」という問いに対応するものであるとされており、この問いが妥当であるかは定性的なインタビューを行って確認する必要があるでしょう。要するに、どんな状況下における認知機能を測定したいのかを明確にする必要があります。

もちろん、多様な知性ラインを測定するために、適切なタスク(設問)を設定することは容易ではありません。しかし、すべての測定手法は何かしらのタスクを設定しているので、これはLASに限った問題ではありません。繰り返しになりますが、LASが独自性を発揮しているのは、多様な知性領域を一つの共通の物差しで測れるということなのです。

168.歪な成長・発達プロジェクトに邁進する私たち

私が成人期以降の知性発達理論を学び始めた頃は、日本にその知見がほとんど取り入れられていなかった。もちろん、エリク・エリクソンのように、高校の倫理の教科書に出てくるほどの著名な発達論者の理論モデルは、日本の高校生ですら知っている。しかし、私がこれまで探究をしてきた成人以降の「構造的(あるいは構成的)発達心理学」は、エリクソンのモデルが示唆するような年齢をベースとした発達段階モデルとは異なる。

エリクソンの発達理論が人口に膾炙したものであるという下地のおかげが、近年、構造的発達心理学の知見が徐々に日本の企業社会を中心として取り入れられつつある状況にある。構造的発達心理学は、欧米諸国において、100年以上も前から研究が行われていたことを鑑みると、時代の隔た

りはあるが、人間の成長・発達に関する学術的叡智が日本社会にも受け入れられ始めている事態を好意的に受け取ってもいいだろう。

ただし、新たなものを取り入れる際に気をつけなければならない課題も多々ある。私が危惧しているのは、人間の成長・発達を直接的に扱う発達理論の考え方や実践技法が歪曲された形で日本社会に取り込まれるとすれば、それは悲劇しかもたらさないということだ。正直なところ、予想される誤認識や回避しなければならない現象は、大方すでに検討がつく。今後の記事では、そのあたりを少しずつ紹介していきたい。

発達理論を学び始めると、多くの人にとって、それはあたかも自分や他者の成長を促進させてくれるきらびやかな理論に見える。しかし、私たち人間は、思っている以上に成長・発達などしないのだ。発達心理学はもはや「心理学」の領域に収まらず、近年、応用数学のダイナミック・システム・アプローチや高度な統計技術を駆使した「発達科学」の様相を見せている。発達科学の進展は目覚ましいものがあり、高次の発達段階の特性や発達のプロセスやメカニズムがかなりの部分まで解明され始めている。

そうした知見を鵜呑みにし、高次の発達段階の特徴を眺めていると、何やら自分も高度な発達段階を獲得したかのような感覚やさらなる成長を遂げることができるのではないかという期待感が芽生えてくるのは理解できる。しかしながら、そうした感覚は幻想であるし、そのような期待感あまり持たないほうが良いと思う。

それらの幻想や期待感に自らを安直に委ねてしまった時、たいてい大きな不幸が起きる。それは、自らの歪曲化された「成長・発達プロジェクト」に縛られ、人生の諸々の出来事をそうしたプロジェクトに組み込んでしまうことだ。例えば、子育てをすることは自分を成長させてくれるから、子育てに従事する。あの人と一緒に仕事をすれば、自分を成長させてくれるから、あの人と一緒に仕事をする。このような倒錯した発想はすべて、自身が盲信する成長・発達プロジェクトから生み出される。

事実、米国のインテグラルコミュニティーで私が目の当たりにしてきたのは、人生におけるあらゆる出来事や関係者を自分の成長物語の中に位置づけようとする奇怪な事態であった。発達理論が大衆向けに分かりやすく紹介され、その知見が多くの人たちの人生に活用されることは望ましい側

面も確かに存在する。しかし、その取り入れ方と取り入れられ方を誤ると、私たちは目覚めることなく、一生涯にわたって歪んだ成長・発達プロジェクトに邁進せざるをえなくなるだろう。

【読者の方からのコメント】

興味深いですね。発達理論やインテグラル理論を「発達主義」や「インテグラル主義」に仕立て上げることなく、醒めた眼差しで眺めていらっしゃるところに感服いたしました。

自分が同一化している「物語」の文脈にすべてを還元解釈しつつ、その物語を信奉しながら、人生の途上で行き当たる出来事に対処したくなってしまいうのも経験上痛く理解できるんですけどね。物語や〇〇主義が自己肯定の源泉になっているとしたら尚更ですし。

【私の応答】

コメントをしてくださり、どうもありがとうございます。おっしゃる通り、今回の記事では「発達主義」や「インテグラル主義」を醒めた眼差しで捉えようとしたのですが、結局のところ、また別の物語や主義に立脚した主張だったのかなとも思います。

常に私たちは、何かしらの物語や主義に基づいてしか意味を構築できない、というのも人間の性ですよね。最近、イタリアの哲学者ウンベルト・エーコの思想を追っていたのですが、彼も「人間は、物語を通してでなければ、自らの生に意味を付与することができない」と述べています。

自らが囚われている、あるいは立脚している物語や主義というものが、一体何なのかを問い続けることに終わりは来ないと思います。しかし、自分の生と真摯に向き合うためにも、私としてはこの探求を終わらせたくはないと思っています。

169. 「涅槃的誤謬」: 発達理論を活用した人財開発や組織開発に見られる認識上の過ち

発達理論が人財開発や組織開発に活用される際に、実務家と組織側双方は、往々にして「涅槃的誤謬(nirvana fallacy)」の罠に絡め取られる。涅槃的誤謬とは、非現実的なものや空想的なものを現実的なものと取り違え、非現実的・空想的な手段を持ってして、現実の課題に対処しようとする認

識上の過ちのことを指す。あるいは、そこから派生して、ある課題を克服するための絶対的な解決策が存在すると盲信する思考特性のことを指す。

発達理論を人財開発や組織開発に活用する際に、こうした涅槃的誤謬に陥っていないかを常に検証する姿勢は、実務家と組織側双方に求められる。人財育成の目標が単に、高次の意識段階を持つ人財を増やすということにある場合、その目標設定は最初から非現実的かつ空想的なものである。企業社会における資本主義のルールに則って、企業が活動を継続させていくためには、企業の競争力をつけることや企業価値を高めることが課題として突き付けられるのは止むをえない。

しかし、企業の競争力や企業価値を高めるという名の下に、組織内の人間を高次の段階へ引き上げようとするのは、どこか飛躍した発想ではないだろうか。高次の発達段階を豊富に抱える組織は、競争力や企業価値が高いという実証結果は、今のところ見られない。現代の金融資本主義の競争原理は過剰であり、競争に勝っていかなければ生き残れないような過酷なゲームである。そうした過酷な競争環境下における諸々の課題を克服するために、藁にもすがる思いで、高次の意識段階を獲得することに懸命になるのは、涅槃を希求する姿と大いに重なる。

残念ながら、個人の成長・発達に焦点を当てる発達理論を持ってしても、人財育成に対して決して万能薬とはなりえないのである。人間の成長を育むというのは、発達理論の射程だけでは到底及ばない深遠な営みなのである。人財育成に携わる者は、発達心理学の知見のみならず、学習理論や教育哲学などの理解が最低限求められ、そうした知識の土台の上に確固とした支援技術を積み上げていく必要がある。

人財育成に携わる者が発達理論の知見を活用する時に、その射程と深さに全てを委ねたくなるような衝動を持ってしまうのは理解できるが、全てを委ねてしまった瞬間に、それはまた涅槃的誤謬なのである。発達理論に過度な期待を寄せ、人財開発の課題を解決するための解を発達心理学というフィールドだけから抽出しようとするのは、非現実的であるが現実においてよく目にする。

同様に、組織の課題を全て人間の問題に結び付けようとする発想も極めて還元主義的である。もちろん、個人が集まって形成される組織において、そこで表出する多くの課題は人の問題と関係するかもしれない。しかしながら、そうした課題の解決へ向けて、人間にのみ焦点を当てるとするのは

ひどく歪曲された狭い発想でしかない。組織上の課題を克服するために、組織内の人間を変革していくことが唯一の解である、という発想もまた涅槃的誤謬の表れである。

発達理論を人財開発や組織開発に適用しようとする実務家や組織は、「構成員の意識段階を高めれば全ての問題が解決する」という涅槃的誤謬に陥らないように注意しなければならない。

170. 学んでも成長しない人に共通する「誇示的学習 (conspicuous learning)」

ふとしたことから立ち寄った神保町の古書店で、アメリカの経済学者かつ社会学者であるソースティン・ヴェブレンの処女作“The Theory of the Leisure Class (1899: 邦訳「有閑階級の理論」)”を購入した。

本書を読み進める中で、ヴェブレンが興味深い概念をいくつも提出していることを発見した。あえて一つの概念を紹介すると、「誇示的消費 (conspicuous consumption)」と呼ばれるものだ。誇示的消費とは、簡単に説明すると、自分の経済力を他者に見せびらかせるために金銭を消費することを意味する。

ソーシャルメディアで流れる情報を見ていると、誇示的消費と密接に関係したものが多くことに気づく。購入したブランド品などをフェイスブック上で紹介するというのもまさに誇示的消費の一例だろう。さらに、優雅な海外旅行の写真を紹介するというのも、誇示的消費——厳密には、ヴェブレンはこれを「誇示的余暇 (conspicuous leisure)」と名付けている——の一例だろう。

ヴェブレンの書籍を読みながら、ふと思いついたことがある。それは、多くのことを学ぼうとしているのだが、一向に伸びない人に共通しているのは、学習という行為が「誇示的学習 (conspicuous learning)」に成り果ててしまっているからではないだろうか、ということだ。「誇示的学習」というのは私の造語であるが、同じ学習をしても、どうも成長しない人に共通の性質なのではないかと思うに至った。

これまで4年間ほど、オンラインで発達理論を学習できるゼミナールを提供させていただいている。多くの受講生を見てきたが、同じ学習コンテンツなのに、ゼミナールの終了後、学習内容がしっかりと身につけている人とそうでない人の差があまりに歴然としているのだ。

当然ながら、講師としての私の力量が不十分であることは紛れもない事実だろう。しかし、受講生の学びに対する態度にのみ議論の焦点を絞った場合、全く伸びない人に共通しているのは、学習するという行為が「誇示的学習」になってしまっているのではないかと思う。

つまり、ゼミナールを受講することで、そこで提供される情報を血肉化させることなく、一時的に情報を浴びることで満足してしまっているのだ。より具体的には、日本ではほとんど知られていない成人以降の知性発達理論という「希少性の高い財」に触れるだけで満足感を得ている人は、学習内容が全く身につかないのだ。

この構図は、超越的な意識状態を体験することに重きが置かれがちな、トランスパーソナル心理学のコミュニティにも見受けられる。「意識状態」というのは、永続的なものではなく、感情状態のように変化が激しく、仮のもの、一時的なものである。一方、構造的発達心理学が扱う「意識段階」というのは、一時的なものではなく、恒常的なものである。

トランスパーソナルコミュニティが、日常では経験できない(希少性の高い)意識状態を体験することに邁進する様子と、日本ではまだ馴染みのない成人以降の知性発達理論の知識に触れることだけで満足感を得てしまう様子は、どちらも共に、根元部分には誇示的消費と関係する人間の欲望が渦巻いている気がするのだ。

どうやら「カネ」と呼ばれるものは、我々が具合的な物を獲得することのみならず、抽象的な情報を獲得することにも多大な影響を与えているようである。誇示的学習をいくら数多くこなしたところで、質的・構造的な成長など起こりようがないため、私たちは一度、自らの学習との向かい方を省察するべきだろう。

171. 読者の方から寄せられた質問事項(No.1):「欲求や願望」と「価値観」の違いとは？

拙書『なぜ部下とうまくいかないのか:「自他変革」の発達心理学』が出版されて、10日ほど経ちました。有り難いことに、本書を読んでくださった方々から様々な感想をいただいております。今後、こちらのウェブサイト上で、読者の方から頂いた質問事項にできるだけ返答したいと思います。

本書の中で説明しきれなかったことが数多く存在したため、質問事項を送ってくださることは大変ありがたいです。送っていただいた質問事項に返答することは、他の皆様にとっても非常に有益な情報になりうるのではないかと考えています。

著者として、本書を「閉じられた書籍」にするのではなく、「開かれた書籍」にしたいと思っています。つまり、専門家のための専門書ではなく、多くの方に門戸を広げながら、読者の方から頂いた質問事項によって、一緒に本書を育てていきたいなという思いがあります。

そうした思いから、まずは下記の質問事項に返答させていただきたいと思います。

『p.155で取り上げられている、「自分の欲求や願望」と「自分の価値観」の違いとは何か、より明確に説明していただけませんか？価値観は人それぞれで異なるため、ある意味自分の価値観に基づいて発言することも、自分の欲求や願望を満たすことと言えるのではないのでしょうか』

これは非常に鋭いご指摘だと思います。確かに、自分の欲求や願望と価値観を峻別することは難しいです。ただし、発達理論の観点からすると、本書で述べている欲求や願望というのは、衝動的な思いや感情のことを指し、価値観とは、より抽象的な自己の規範や行動指針のようなものを指します。

例えば、段階2ですと、「イライラしたから部下を叱る」というように、衝動的な苛立ちの感情と同一化してしまい、そうした感情を抱く自己を客体化することができません。一方、段階4に到達しても、イライラという感情は当然生まれますが、段階4の人は、もはやそうした感情と同一化することなく、自己を冷静に客体化できる認識能力を兼ね備えています。

そのため、段階2の人に「なぜ部下を叱ったのですか？」と問うと、「イライラしたから」という実に利己的な回答が返ってくるでしょうし、「それでは、なぜイライラしたのですか？」と問うと、「分かりません。とりあえずむしゃくしゃしてました」という回答しか返ってこないことが推測されます。要するに、自分の感情がどこから生まれてきたのかを理解できるほどの内省能力が備わっていないのです。

一方、段階4の人に同様の問いを投げかけると、「部下を叱ったのは、自分がイライラしていたからなのですが、衝動的な振る舞いをしてしまったことを恥じています。その時の自分は、あまりにも仕

事が忙しく、手一杯な状況であったため、部下に対して親身に接する心のゆとりがありませんでした。そうした心のゆとりのなさが、イライラの感情につながり、結果として衝動的に部下を叱ってしまったのだと思います」というような回答が返ってくるでしょう。

まとめると、「自分の欲求や願望」に従っているのか、「自分の価値観」に従っているのかを基準にして、段階2と段階4の相違点を探ろうとすると混乱してしまうと思います。そのため、上記のように、自己の客体化能力の違い、言い換えると、内省能力の深さに着目すると、両者の違いがより明確になるのではないのでしょうか。

また、質問の後半部分に関して、これもまたごもっともなご指摘です。価値観を物事の優先順位づけの判断基準や好き嫌いの判断基準と解釈すると、それはどんな段階の人も必ず持っているものと言えます。しかし、ロバート・キーガンが述べる「価値体系の枠組み」とは、それらの単なる判断基準とは異質のものです。

端的に述べると、両親や周りの友人からの影響を含め、学校や社会の中で生きていく過程で構築されたそれらの判断基準を客体化させ、それらを批判に晒せるような認識の枠組みのことを、キーガンは「段階4的な価値体系の枠組み」と定義しています。

要するに、段階4に到達して初めて、これまで自分が盲目的に従っていた種々の判断基準を疑いの目を持って検証し始め、これまでの判断基準とは次元の異なる新たな判断基準を構築することができるようになります。

さらに、「自分の価値観に基づいて発言することも、自分の欲求や願望を満たすことと同じなのではないか？」という問いに関して、これはYesでもあり、Noでもあります。

Yesについて述べると、もし「自分の価値観」というものを「衝動的・利己的な判断基準」と定義し、「自分の欲求や願望」を「衝動的・利己的な感情や思い」と定義するのであれば、そうした判断基準に従った発言は、段階2的な欲求や願望を満たすためのものであると言えます。

しかし、もし「自分の価値観」というものを「衝動的・利己的な判断基準を超え、さらに、既存の所属集団や社会が作り上げた他者依存的な判断基準を超え、それらを批判の目にさらした後に生まれ

てくる判断基準」と定義し、「自分の欲求や願望」を「衝動的・利己的な感情や思いを超え、集団や組織に従属したいという感情や思いを超え、自己の独自性を認めてほしいというような感情や思い」と定義するならば、そうした判断基準に従った発言は、段階4的な欲求や願望を満たすためのものであると言えます。

これがNoという回答です。つまり、「価値観」という言葉や「欲求や願望」という言葉が内包する意味には、次元が存在し、「段階1的な価値観もあれば、段階2的な価値観もある」「段階1的な欲求や願望もあれば、段階2的な欲求や願望もある」ということです。

要するに、同じ言葉でも、意識段階が異なれば、次元が全く異なる意味がそこに付与されており、「価値観」や「欲求や願望」を例にとってみても、段階の数だけ異なる意味が存在するという事です。意識段階が異なれば、意味の内容が全く次元の異なるものになる、というのはありとあらゆる言葉に当てはまります。

以上の説明が少しでもお役に立てば幸いです。今回お送り頂いた質問のように、本書を読み進める中で質問事項が出てきたら、何なりとご連絡いただければ幸いです。

【追記:「開かれた書籍」の具現化】

書籍が一度世に送り出されると、そこからは著者の手を離れ、読者の皆さん一人一人が独自の意味を汲み取ったり、独自の意味を付与していくこととなります。時に、あるいは常に、著者の意図とは異なった意味の捉え方が存在するでしょうし、本書をきっかけにして読書の方が紡ぎ出す意味も多様なものになると思います。

そうした現象が起こるのが、ある意味、書籍の醍醐味でしょう。冒頭で、本書を「開かれた書籍にしたい」という私の思いを述べさせていただきましたが、まさに私も一人の読者として、この本に関与していきたいと思っています。

「開かれた書籍」というのは、多くの方に門戸を開くという意味にとどまらず、システム理論で言う「オープン・システム(開かれた系)」のような書籍となり、皆さんとの相互作用によって、常に新たな意味や物語がそこに生起し続けるような、躍動した書籍になってほしいと思っています。

拙書がそのような書籍として具現化されるためには、読者の皆さん一人一人から得られる質問事項が貴重な存在となります。そのため、頂いた質問事項に対して、私なりの回答を共有させていただき、意味や物語が重層的かつ躍動的に生じ続けるような生きた書籍になってくれればと願っています。

172. 読者の方から寄せられた質問事項(No.2): 室積さんの問いかけの裏側

今回は、「本書では、室積さんは、山口さんの成長を支援するために、意識的に山口さんの発達段階にあった問いかけをしているのでしょうか？それとも、単純に発達理論を教えているに過ぎないのでしょうか？」という質問に返答させていただきたいと思います。

さて、上記の質問事項に対して、皆さんはどのように思われますか？本書の趣旨は確かに、読者の皆さんに、ロバート・キーガンが提唱する構造的発達理論の理解を深めていただくことにありました。そのため、一見すると、室積さんは山口さんに発達理論を教えているだけに見えるかもしれません。

しかし、著者の観点からすると、室積さんは山口さんに、単純に発達理論を教えているわけではありません。質問の前半部分にあるように、室積さんは山口さんの成長を支援するための「対話」を行っているのです。

要するに、本書で展開されるやりとりは、一方的な知識の伝授ではなく、意識の構造的な発達を支援する「対話」と考えています。

それでは、室積さんは、意識的に山口さんの発達段階にあった問いかけをしているのでしょうか？発達理論をもとにしたコーチングやメンタリングという臨床実践から得られた私の経験からすると、室積さんは無意識的かつ意識的に、山口さんの発達段階に応じた対話を行っていると考えられます。

まず、「無意識的に発達段階に応じた対話を行っている」というのはどういうことかを説明します。本書のp.225に記載されているように、私たちには、他者の発達段階を見極める「直観力」のようなものが備わっています。

実際には、そうした直観力のみならず、私たちには、無意識的に相手の発達段階に応じたコミュニケーションを図るような「調整力」も備わっていると考えています。例えば、赤ちゃんに接する時と友人に接する時を比較してみると、同じ問いかけが行われているのでしょうか？

答えは明白で、両者は質的に異なったものであると思います。未だ言語を獲得していない赤ちゃんに対して、プラトンが垣間見た形而上学的世界に関する説明をしたところで、赤ちゃんは理解してくれないと思います。一方、友人に対して、「いないいないばあ」だけで接するというのもおかしな話です。

つまり、一般的に私たちは、直感的に他者の意識段階を把握し、他者の意識段階に応じたコミュニケーションをほぼ無意識的に行うことができます(ただし、近年、人口に膾炙し始めている「社会病質者(ソシオパス)」や「自閉症」を持っている方は、他者の意識段階に応じたコミュニケーションを無意識的に行うのは困難かと思われま

す)。こうした観点からすると、室積さんは山口さんの意識段階に合わせたコミュニケーションを無意識的に行っていた、という見方ができます。

それに加えて、室積さんは、山口さんの意識段階を考慮した意識的な言葉かけをしていたとも見ることができます。おそらく、室積さんを発達支援の専門家たらしめているのは、まさにこの点だと思います。

どういうことかという、発達理論に関する室積さんの造詣は非常に深く、室積さんの頭の中には、各発達段階の特徴に関する詳細な情報が格納されており、山口さんの現在の発達段階をそうした理論的な枠組みを通じて把握し、山口さんが次に到達するであろう段階の特徴を考慮した意識的な言葉かけを行っていたということです。

p.44に記載があるように、原則として、私たちは自分よりも上の意識段階を理解することはできません。自分よりも高次元の世界の絵を描くことができないというイメージです。発達支援者に求められるのは、相手が次に到達する世界の絵を詳細に伝えるのではなく、その一部、もしくは輪郭だけでも示してあげることにあります(こうした介入の仕方は、専門用語で「足場かけ(scaffolding)」と呼ばれます)。

このアプローチを採用することによって、山口さんは、本来一人であれば、全く想像もつかないような次なる発達段階のイメージを持つことが可能になったと言えます。これが実現された背景には、室積さんが発達理論に関する豊富な知識を有しており、山口さんの現在の立ち位置と次なる段階の距離を的確に見極めていたことがあります。

そして、室積さんは、問いかけを通して、次の段階に到達して始めて開示される世界のイメージ図を意識的に山口さんに伝えていたと考えています。

173. 読者の方から寄せられた質問事項(No.3):成長の必要条件と十分条件

今回は、「山口さんは室積さんのコーチングで成長していきますが、室積さんのどんな問いかけが、どのように山口さんに作用して、山口さんを成長させているのでしょうか？それが、見えるようで見えません。山口さんは、ただ発達理論を教えてもらっているだけのようにも見えます。発達理論を学んだからといって、おのずと成長するわけではないと思います」という質問を取り上げさせていただきます。

本書の大きな狙いは、成人発達理論の枠組みを掴んでいただくこと、特に、ロバート・キーガンの意識発達モデルを理解していただくことにありました。そのため、本編の中でのやり取りは、どうしても発達理論を解説することに比重が置かれています。

その結果として、室積さんのどのような問いかけが、山口さんにどういう風に作用していたのかが見えにくくなってしまっていたのだと思います。

ご指摘の通り、意識の構造的な発達には、単なる知識の授受で成し遂げられるものでは決してありません(知識の絶対量の増加は、まさに本書の中で紹介した「水平的成長」と呼ばれるものであり、構造的な成長、つまり「垂直的な成長」とは異なるものです)。それゆえに、発達理論を学んだことによって、直ちに成長すると考えてしまうのは早計であり、発達理論はある意味、成長発達の見取り図に過ぎないのです。

つまり、発達理論は、「さらなる成長にとっての必要条件であり、十分条件ではない」という性質を内包しています。発達理論の枠組みがない場合、成長プロセスにおける現在地と目標地点を特定することが困難になってしまいます。

その結果、自分はどこに向かって歩みを進めていったらいいのかわからなくなり、現在地という安息地帯に安らいでしまい、さらなる成長が生まれることはないでしょう。そうしたことを考えると、発達理論は、人間の成長という実に複雑怪奇な迷宮を突き進むための道しるべとしての役割を果たしてくれると思います。

しかし、注意が必要なのは、こうした道しるべを獲得していることが、さらなる成長を確約するわけではないということです。教育哲学者のジョン・デューイが指摘しているように、やはり私達は経験から学ぶ生き物なのです。

さらなる成長を実現するためには、発達理論という見取り図を持って、この世界を実際に歩むという実践がどうしても必要になります。実践の形は多種多様ですが、本編の中で注目していただきたいのは、室積さんの協力を得ながら、山口さんが各セッションごとに「アクションプラン」を立て、それを着実に実践していたことです。

紙面の都合上、山口さんが具体的にアクションプランを実践している姿を描写することはできませんでしたが、山口さんは単に発達理論を概念的に学んでいたのではなく、実践を通して学び、それが成長に繋がっていたのです。

とかく実践活動は、単なる「体験」にとどまってしまうがちなのですが、室積さんは各セッションの最初に、山口さんがアクションを通じてどのような学びを得られたかを問うています。アクションを通じて、どのような気づきや学びが得られたかを確認すること——厳密には、内省し、言語化すること——は、まさに、体験を「経験」に昇華させるために不可欠な営みです。

こうした振り返りがなければ、体験は体験として消費されてしまい、それは成長に何ら寄与することはないでしょう。成長に必要なのは、一過性の体験ではなく、体験が咀嚼された経験なのです。

室積さんのどんな問いかけがどのように山口さんに作用しているのかを説明すると、説明が極めて長くなってしまったため、要諦を一言で述べると、室積さんと山口さんは「会話」を行っているのではなく、「対話」を行っているという性質上、そこで交わされるすべての問いかけと応答が、「お互いの」成長に寄与していたと考えています。

174. 意識の高度化が孕む危険性:「心的位置エネルギー」の増加に伴う暴力

発達理論の学習者は、意識の高度化を過度に擁護しようとする発想に必ずどこかで陥る。これまで長らく発達理論と付き合いしてきた経験上、意識の発達に関する探究を継続させていくためには、意識の高度化に何らかの意義を見出すことは確かに必要であると理解できる。

しかし、意識の高度化が不可避に内包する負の側面に着目しないというのは、相当浅薄な探究姿勢だと思う。意識の発達と深く付き合うためには、意識の高度化が持つ光の側面だけでなく、どうしても闇の側面を直視する必要があるのだ。

ロバート・キーガンやビル・トーバートの著作がここ数年において翻訳出版されているのを見ると、日本において、成人期における構造的な発達心理学の思想は、間違いなく黎明期にあると言える。こうした時代背景の最中、構造的な成人発達理論が今後どのように日本に普及していくのかは、非常に重要なテーマだと思う。

構造的な成人発達理論を導入するにあたって、まず焦点を当てなければいけないのは、意識の高度化が持つ負の側面だろう。意識が高度になるということがどれだけの危険性を内包しているかというのは、物理学における「位置エネルギー (potential energy)」という概念を援用すればイメージが付きやすいだろう。

皆さんの右手の手のひらを上にかざし、手のひらから3mm程度の高さから、ハガキと同じ大きさのレンガを落としてみることを想像してみてもらいたい。その破壊力(痛み)はどれほどのものだろうか？想像するに、3mm上からレンガを落としたところで対して痛みはないだろう。

それでは、スカイツリーの頂上から皆さんの右手の手のひらめがけて、そのレンガを落としたらどうだろうか？間違いなく、手のひらはぐちゃぐちゃになり、大きな痛みを伴うだろう。それでは、この背後にはどんな原理があるのだろうか。

背後にある原理は簡単であり、物体は高い位置にあるほど位置エネルギーを増すというものだ。そして、この原理は、意識の発達にもほぼ同じように作用する。

つまり、意識が高度になればなるほど、「心的位置エネルギー (mental potential energy)」が増加し、途轍もない破壊力を持つということだ。発達理論と哲学思想に関して、私のメンターを務めてくれていたザカリー・スタイン (Zachary Stein) がたびたび口にしていたが、「ダースペーダー・ムーブ」は常に起こりうるものなのだ。

要するに、高度な意識段階を獲得することによって醸成された心的位置エネルギーは、社会を望ましい方向に変革するために使われるとは限らず、社会を没落と破壊に導くために行使される危険性があるのである。

端的な例は、第二次世界大戦中において、我が国が被った悲劇だろう。この戦争で日本は、原爆投下という惨事に見舞われた。そもそも原爆という具体的な物体の根源には、アインシュタインが提唱した極度に高度な物理方程式「 $E=mc^2$ 」があったのである。

アインシュタインという、物理学の領域において高度な知性を獲得した者によって発見された方程式は、それが極めて高度なものであったがゆえに、歪曲された形でそれが用いられると、私たちの生存を脅かす惨事に直結するのだ。

そもそも意識が高度になったところで、私たちの心の闇が消えることはなく、むしろ闇の力もより強靱なものになるため、今後日本において構造的な成人発達理論が普及する中で、意識の高度化を手放しに称賛する動きに対して私たちは抗う必要があるだろう。

175. ハーバード学派とフランクフルト学派の発達思想: 甘い香りと苦い味

拙書『なぜ部下とうまくいかないのか: 「自他変革」の発達心理学』の帯文の中で、私の師匠の一人であるオットー・ラスキーが言及しているように、私はハーバード学派とフランクフルト学派の発達思想に強く影響を受けている。私の発達思想は、両者の学派によって育まれたものであると言っても過言ではない。

ハーバード学派の発達思想とは、道徳的知性の研究で功績を残したローレンス・コールバーグを筆頭に、コールバーグの弟子であるキャロル・ギリガンやロバート・キーガンたちによって拡張された構造主義的発達心理学の枠組みに基づいた発達観である。

一方、フランクフルト学派の発達思想は、“Dialectic of Enlightenment (邦訳「啓蒙の弁証法」)”の著者であるマックス・ホルクハイマーとテオドール・アドルノが創始した哲学思想に由来する。最近私に関心を寄せているヨルゲン・ハーバマスはフランクフルト学派の出身であり、何より私の師であるラスキーは、ホルクハイマーとアドルノに直接師事をして博士号を取得している。

要するに、私は、キーガンを筆頭にしたハーバード学派の発達思想のみならず、フランクフルト学派の発達思想からも多大な影響を受けているのだ。そう考えてみると、これまでの私の探究活動は、両学派が形成してきた発達思想の系譜の中に位置付けられるのだと思う。

どちらの学派も人間の知性発達に関する論考を数多く残しているが、どうも両者の思想が持つ香りと味は相当異なる気がする。言い換えると、両者の発達思想が持つベクトルの方向性が違うように思えるのだ。

端的に述べると、ハーバード学派の発達思想には、どこか甘い香りが立ち込めているような感覚を受ける。「上へ上へ」という上昇的な発達観とでも呼べるだろうか。

要するに、ハーバード学派の発達思想は、「発達することは善である」という安直な思想を信奉する傾向がある、あるいは、意識の高度化に伴う危機意識が希薄のように思えるのだ(しかし、ハーバード大学教育大学院で博士号を取得したザカリー・スタインは、自らが所属する学派のそうした思想傾向に対して確固たる警鐘を鳴らしているという点において、本当に優れた哲学者だと思う)。

一方、フランクフルト学派の発達思想は、どこことなく苦々しい味がする。人間の知性発達という観点から、“Dialectic of Enlightenment”という書籍を読み返すと、ホルクハイマーとアドルノは、知性の高度化に伴う危険性を見事に掴んでいたのだとわかる。

ホルクハイマーとアドルノは、人間が合理的な知性を獲得したにもかかわらず、なぜ人々はナチスのような野蛮へ走ったのかという原理を考察している。ホルクハイマーとアドルノの思想には、まさに、意識の高度化によって暴走した人間に対する省察が刻印されている気がするのだ。

両者の思想に長らく触れて思うのは、ハーバード学派の発達思想は知性発達の光の側面に焦点を当てる傾向が強く、フランクフルト学派の発達思想は知性発達の闇の側面に焦点を当てる傾向が強い、という大きな違いがあるということだ。

そうしたことを考えると、知性発達に伴う光と闇を的確に捉えた哲学思想を展開しているザカリー・スタイン(Zachary Stein)は稀有な存在であるし、発達理論をこれから学ぼうとする日本の方々にとって、彼の思想は多大な洞察をもたらしてくれると思う。

176. 二重の虚構構造によって縛られている現代の日本語空間

現在、成長・発達の上昇的プロセスのメカニズムを探究するというよりも、下降的プロセスのメカニズムを探究することに重心がある。つまり、より成長・発達していくための要因やメカニズムを明らかにするというよりも、成長・発達を阻害・抑圧する要因やそのメカニズムを解明し、そうした要因やメカニズムに対して働きかける方策を模索している。

そうした関心を持っている最中、偶然ながら、江藤淳氏の「閉ざされた言語空間：占領軍の検閲と戦後日本」という書籍と出逢った。本書は、第二次世界大戦後の米国による日本に対する言論統制の実態を取り上げている。

第二次世界大戦後、米国が厳しい検閲を行い、日本を言語的側面・思想的側面から弱体化させようとしたことを表面的に論じている本は多いと思うが、本書は、江藤氏が米国在住時代に自らの足で行った緻密な文献調査によって生み出されたものであり、内容的に骨太である(逆に、記載されている文献データが多いぐらいであるが)。

本書を読む必要があると思った背景には、成人以降の構造的発達心理学の枠組みが、欧米諸国で研究や実践が始まってから30年以上遅れて、ようやく日本で普及し始めている、という事実を目の当たりにしたことがある。構造的な成人発達理論が日本に紹介されるのがここまで遅れたことは、その裏には言論統制や情報統制があったのではないか、と思わせるぐらいの事態である。

構造的な成人発達理論が日本に紹介されることに関して、そこまでの作為的な働きかけが存在していなかったとしても、実に奇妙なことだと感じた。

インターネットがここまで普及した現代社会において、英語がある程度できれば、英語空間に自らアクセスし、構造的な成人発達理論に関する論文を読むことは容易であるし、専門書籍を海外から取り寄せることも実に容易である。

こうした状況に私たちは置かれているにもかかわらず、日本語という言語空間に盲目的・墮落的に依存することをやめ、自らの意志で他言語空間に分け入っていかないのはなぜなのか？そんな素朴な疑問があったのだ。

本書の中で江藤氏は、いくつか示唆に富む指摘をしている。

特に、『まず日本を、「実効ある検閲の網の目」によって包囲し、その言語空間を外部の世界から完全に遮断する。しかるのちに「広汎な検閲攻勢」によって、この閉ざされた言語空間を占領権力の意のままに造り変える(p.139)』ということが戦略的・組織的に行われていたという記述が印象に残っている。

こうした検閲によって被った後遺症を今も日本は患っている気がしてならない。この一年間、日本で生活をしていて感じていた精神的な息苦しさや閉塞感は、これまでもずっと水面下で生じていた閉ざされた言語空間の呪縛を肌感覚で感じ取っていたからなのかもしれない。

さらに、この精神的な息苦しさや閉塞感は、第二次世界大戦後の外側からの言論統制の余波に起因しているだけではなく、新聞やテレビなどのマスメディアやソーシャルメディアによる日本社会の内側からの言論統制という二重の構造によってもたらされている気がしている。

日常生活の中で私たち個人が構築する意味は、本質的に虚構の産物であるということを考えると、外からの言論統制という虚構、内からの言論統制という虚構、という二つの虚構構造の中で、私たちは日々せわしなく虚構の産物を作り上げることに腐心していると言える。

そうした状況に抗うための、実行可能な最も容易なアクションは、日本語という閉じられた言語空間のみに依存することをやめ、他言語空間(特に英語空間)に自ら分け入って行くことだと思うのだが。

177. 欲求の多様化と自己実現なるものについて

英国経験主義哲学の代表的人物であるデイヴィッド・ヒュームの思想に目を向けてみると、人間の意識の発達に関して示唆に富む言及が散見される。

ヒュームの経済発展思想によると、商業活動というのは中世以前から活発であったように見えるが、そこでは単に各地域の農業的特産物が交換されていたに過ぎず、多様な商品が交換されるようになったのは、製造業の台頭以降であるという。

農業的な特産物を交換するというのは、ある種、「食べる」という生存上の欲求と密接に関わったものであり、それ以上の欲求が関与することはそれほどない。

しかし、製造業、とりわけ精巧な技術を伴った手工業が発展することによって、種々の嗜好品が生み出され、農業的な特産物が交換されていた時代とは異なった欲求が人間の中に芽生え始め、欲求が多様化していった、とヒュームは考えている。

ヒュームは、製造業の台頭により、人間の欲求が多様化したことを持ってして文明の進歩と捉えたが、果たしてそうだろうか？ 欲求の多様化と文明の進歩を単線的に結んでしまっているのだろうか。

現代社会は、中世時代とは比べ物にならないほどの多様な商品で溢れかえっており、人間の欲求はますます多様化する方向に向かっている。そうした観点からすると、ヒュームは、現代社会は中世と比べて文明の進歩を遂げたとみなすかもしれない。

しかし、文明の進歩とは、本来、集合の内面領域(文化や精神風土)と集合の外側領域(制度や仕組み)の質的向上のことを指し、また、それと足並みを揃えて、個人の内面領域と外側領域が質的に向上することを指すのではないだろうか。

確かに、農作物だけを交換していた時代から、工業製品を生み出し、それを交換する時代に変遷していった背景には、技術的・制度的な洗練化が不可欠のものとして存在していた。その点においては、集合の外側領域の質的向上がなされたと言えるだろう。

しかしながら、それは他の領域、とりわけ個人の内面領域の質的向上と連動したものだったかという点、そうではないと思うのだ。特に、ここで注目したいのは、欲求の「多様化」という言葉である。

ヒュームは、市場経済の発展に伴って人間の欲求が様々な種類を持つようになる、という意識の量的な成長を捉えてはいたが、欲求が「深まっていく」という意識の質的成長について考察することはあまりなかったのではないかと思わされる(ヒュームが残した最重要著書“A Treatise of Human Nature (1738)”を断片的にしか読んでいないので、その辺りの記述もあるのかもしれないが)。

もし、ヒュームは、経済の発展によって人間の欲求が多様化したとしても、必ずしも欲求の深層化に繋がらないと考えていたのであれば、正鵠を射ている気がする。

現代社会においても欲求の多様化は進む一方であり、「自己実現欲求」というのはまさに好例だろう。本来、アブラハム・マズローが提唱した自己実現欲求というのは、人間欲求の中でも深層的かつ高次元のものであった。

しかし、現代人が用いる「自己実現」という言葉の真意を確認すると、それはマズローが真に伝えようとしていた意味とは大きくかけ離れたものであることがわかる。現代において用いられる「自己実現」という言葉が指すものは、基本的には経済的な収入を拡大させ、欲しいものを手に入れ、何ものにも囚われることなく気楽に生きる、という状態のことを言うのだろう。

しかしながら、マズローが述べている自己実現欲求とは、そうした経済的・物質的な単なる拡張を希求する衝動ではなかったはずであるし、何かからの解放を求めるような精神性ではなかったはずである。「自己を実現する」とは、自らの実存的な問題と対峙し、自己の限界性に打ちのめされながら

も、それでも深層から芽生えてくる自己の本質に気付くこと、あるいは、自己の本質の芽を何としても発露させるという不屈の試みなのではないか。

百歩譲って、自己の本質に基づいた行為や活動が社会的に価値あるものとして認識され、それに対して経済的な対価が付与されたとしても、何かからの解放が得られるとは到底思えないのである。全く逆に、自己の存在という解放されえぬものに気付くことが、真の意味での自己実現なのではないかと思う。

自己の存在が自らを絶望的なまでに呪縛していることに気づけた時、そこに私たちは別種の解放を見出すことになるのだろう。

178. 道徳的知性発達論者としてのアダム・スミス

『国富論』よりも重要な書籍とみなされる、アダム・スミスの『道徳感情論』を大学時代に図書館で眺めたことはあったが、じっくり読もうと思ったことはこれまでなかった。

“The Theory of Moral Sentiments (1759)”を改めて読むと、スミスがいかに優れた「道徳的知性発達論者」であったかがわかる。スミスは、「調和ある社会を実現させる原動力は何であるか？」という問いをもとに、個人の心理と社会の関係を解明しようとして本書を執筆した。

とりわけ注目に値するのは、調和ある社会の実現に向けて、人間が個人の利己的な衝動を乗り越えて、「共感」を生み出していく道徳的知性を育てていくプロセスを発見したことだろう。つまり、スミスは、ロバート・キーガンの発達モデルで言うところの、段階2から段階3への移行過程を明らかにしたということだ。

スミスの説明論理は、発達理論の説明論理とほぼ合致している。スミスの道徳的知性発達理論の出発点は、私たちは想像力を働かせて自分自身を他者の立場になって考え始める、ということにある。

他者がどのような気持ちなのか、他者がどのようなことを考えているのかを思考の対象にできるのは、発達理論の世界では「二人称的な視点取得能力(2nd person perspective-taking ability)」と呼ばれる。

そして、スミスは、他者の立場になって考えてみることによって「共感」が得られるとし、その思考プロセスを繰り返すことによって、最終的には目の前の他者と自分にも偏らない「公平な観察者(impartial spectator)」としての共感の境地に達すると述べている。

言い換えると、他者と交流する中で、他者の立場になって考えるという二人称的な視点取得能力を練磨した結果、自己と他者の両者を客体化させるという「三人称的な視点取得能力(3rd person perspective-taking ability)」が芽生え、より高度な共感を得ることにつながるということだ。

スミスは、デイヴィッド・ヒュームの“A Treatise of Human Nature(邦訳:『人間本性論』)”から多大な影響を受けたと言われているが、まさに、人間は本質的に歴史的な存在であり、他者との交流を通じて私たちは人間性を涵養し、その過程で身につけた「共感」を社会秩序の基礎に置く、というヒュームの哲学思想をスミスから汲み取ることができる。

さらに、個人的に興味深いと思ったのは、「私たちは、ある傾向の行為を他の行為よりも好ましいと思ひ、一方を正しいものとして認識し、他方を正しくないものとして認識してしまうのはどうしてであり、またどのようなメカニズムによるのか？」という問いをスミスが立てていることだ。

様々な説明論理が考えられるだろうが、発達理論の観点からすると、私たちは、自らの道徳的知性の発達段階を通じてある行為を認識し、自分の知性段階の枠組みによってその行為を解釈するため、ある行為を正しいとみなしたり、間違いであるとみなしたりすると言える。

思うにも、ここでも「共感」という働きが起こっていることが伺える。つまり、ある道徳的知性段階にいる人が生み出す行為を正しいとみなす時、その行為を生み出す人物の道徳的知性に私たちは共感していると言えるのではないか。両者の道徳的知性段階が半ば無意識的に共鳴し合っているような現象だ。

ただし、注意が必要なのは、高度な道徳的知性を持つ人の行為が常に正しいものであるという保証はないし、単に表面上の行為に共感している状態も考えられるということだ。

こうしたスミス問いを発達心理学のアプローチから探究していったのがローレンス・コールバーグである。スミスの200年後に、コールバーグは道徳的知性の発達プロセスに関して、より洗練された理論モデルを提唱することになったのだ。

【追記:「視点取得能力」に関する発展学習】

今回の記事で取り上げた「視点取得能力 (perspective-taking ability)」について、より詳しく学びたいと思われる方には、ウェブサイトの「学習教材」の категорияにある「[発達段階測定講座](#)」をお勧めいたします。

こちらの講座では、ロバート・キーガンが提唱する16個の発達段階の特徴を学ぶ過程で、視点取得能力の成長についても取り上げています。上記の記事では取り上げることのできなかつた「四人称的な視点取得能力 (4th person perspective-taking ability)」というさらに高度な能力についても言及しています。

179. 貨幣崇拝と成長崇拝

現在、松原隆一郎氏の『経済思想入門』(ちくま学芸文庫)とKenneth Hooverの“Economics as Ideology: Keynes, Laski, Hayek, and the Creation of Contemporary Politics” (2003)を同時並行的に読み進めている。私たち個人の意識の成長・発達、半ば強制的に集合的な意識によって影響を受ける。

そのため、私たちを取り巻く経済思想や政治思想を理解せずして、個人の意識の成長・発達を理解することはできないと思うのだ。こうした書籍を読み進めながらふと気付いたのは、現代人の「貨幣」に対する捉え方と、「成長」という概念の捉え方は酷似しているということである。

ヘーゲル死後、ヘーゲルの哲学を独自に展開させたヘーゲル左派は、興味深い発想を持っている。ヘーゲル左派は、「神が人間を」ではなく、「人間が神を」自分たちに似せて創造したと考えており、神を創った人間は、自らが創り出した神を崇拜し、その支配下にある、と指摘している。

これは、人間が自ら造り出した「貨幣」を神のように崇拜し、私たちはその支配下に置かれているという現代社会の状況と瓜二つである。自ら作り出したものが私たちと切り離されてしまい、私たちが逆にそれらによって支配され、人間が自己のあるべき姿を見失う状態のことをヘーゲル左派は「疎外(alienation)」と呼ぶ。

多くの人々が貨幣に対して無意識的・意識的に拝跪している姿を見ると、そうした人々は疎外状態に置かれていると言えるのではないか。貨幣を崇拜し、貨幣獲得に躍起になることによって、そうした疎外状態をさらに深刻なものにしているのである。

さらに問題は貨幣だけにとどまらず、同様のことが「成長」という概念に対しても起こりうる。それは、「成長」に対する崇拜と「成長」という概念がもたらす疎外状態だ。

つまり、私たちは自らが生み出した「成長」という概念によって、「より成長しなければ、より成長したい」という脅迫感に駆られ、「成長」という概念を崇め奉ることによってその支配下に置かれてしまうのである。

貨幣を果てしなく追求しようとする飽くなき性向は、「貨幣フェティシズム」と呼ばれる。そうであるならば、成長を果てしなく希求する飽くなき性向のことを「成長フェティシズム」(造語)と呼んでもいいのではないか？

それらはともに同じようなプロセスで生み出され、同じような姿を持っている気がするのだ。

企業社会における既存の人財育成やサービス領域として確立されつつあるコーチングが双方に共通して持っている思想は、貨幣獲得競争に向けて無心に働ける人間をより多く生み出し、「さらなる自己成長」という甘言によって、貨幣崇拜のみならず成長崇拜を私たちに強制する装置として働いているという側面が多分にあると思うのだ。

180. 読者の方から寄せられた質問事項(No.4):「曖昧なものの受容」について

拙書『なぜ部下とうまくいかないのか:「自他変革」の発達心理学』について、新たに頂いた質問をご紹介します。

質問:「曖昧さについて」47ページや135ページに出て来る『曖昧なものの受容』というのがなかなかイメージしにくいのですが、何かヒントがあればお願いします。

回答:確かに、「曖昧なもの」とは具体的にどのようなものなのか？そして、それを「受容する」というのはどういうことなのか？本書の中で、それらを明瞭にしておらず、申し訳ありません。

まず、「曖昧なもの」とは、一言で述べると、現時点では明確に認識できない何かのことを指します。そして、現在の認識能力では捉えることのできないものは、ケン・ウィルバーのインテグラル理論で言うところの、4象限的(all quadrants)かつ段階的(all levels)なものとして私たちの目の前に常に立ち現われています。

具体的には、個人の内面領域において、自分の心の中にある見たくないもの、意識したくないものとしての「シャドー」は分かりやすい例です。日常生活を送る中で、私たちのシャドーは気づかないところで諸々のいたづらを私たちにしてきますが、こうしたものは元来、掴み所のない曖昧なものとして心の奥底に存在していると思います。

そうした無意識下に存在している抑圧された思考や感情は、個人の内面領域に存在する曖昧なものと言えます。本書の中で言えば、これまでは気づかなかった自分の思い込みなどは、まさに曖昧なものの一つだと言えます。

そして、身体の状態や物理的身体を超えたエネルギー体の変化などが、個人の外面領域における曖昧なものとなります。p.96の『感情的になる部下への対処法』のエピソードにおいて、山口課長は、利己的な部下の感情的な反応に対して、ついつい感情的な対応をしてしまい、「頭に血がのぼる感じがする」と述べています。

つまり、ここでは、山口課長にとって、室積さんから問いかけがあるまでは、「頭に血がのぼる」という身体状態を客体化できておらず、それは存在しないものとして「存在していた」と言えます。こうした存在しないものとして存在している身体の微妙な変化は、まさに「曖昧なもの」の一例だと考えています。

さらに、集合の内面領域において、所属する組織の精神性や文化、社会の精神性や文化といったものは、私たち個人の心や行動に多大な影響を与えていますが、それらは目に見えないところで常に私たちに働きかけているという点において、それらを曖昧なものとみなすことができるのではないかと考えています。

本書の中で言えば、山口課長の会社で蔓延する「大企業病」という組織風土、さらには、成長を強制するような暗黙的な文化はまさに、これはまでは意識化することができなかったという性質上、それらは山口課長にとって曖昧なものであったと言えます。

4つ目の分類は、集合の外側領域における「曖昧なもの」です。私たちを取り巻く外部環境を冷静に分析してみると、その分析作業は終わりが無いことがわかります。

例えば、経営戦略を立案する際に、必ず市場分析を行う必要があると思いますが、「市場」というものはブヨブヨしたお化けのように捉えどころがなく、仮に何かしらの観点とアプローチを持って詳細な分析ができたとしても、特定の観点とアプローチを採用した瞬間に盲点となる箇所が存在していると思うのです。それらはまさに外側領域における曖昧なものと呼べるのではないのでしょうか。

本書の中で言えば、山口課長の会社が推進している「次世代人財育成プログラム」は、室積さんとの対話によってその形骸化に気づかされたという意味において、山口課長にとっては曖昧なものであった、と言えます。

そして、曖昧なものは、単に4つの象限を通じて私たちの眼前に立ち現われているのではなく、それらには「段階(レベル)」が不可避につきまっており、事情をより複雑なものとしします。

すなわち、シャドーを一つ取ってみても、浅いシャドーと深いシャドーがあり—どの発達段階で形成されたシャドーなのか? など—、身体エネルギーの状態を取ってみても、粗大な身体(gross

body)における曖昧な現象、微細な身体(subtle body)における曖昧な現象等々、4つの象限を通じて顕現化する曖昧なものは、それぞれ深層的な差異、つまりレベルを持っています。

以上が「曖昧なもの」に関する大雑把な説明になります。

そして、それらを「受容する」というのはどういうことかという、一言で述べれば、曖昧なものを認識し、それらを咀嚼し、新たな認識を生み出していけることだと捉えています。あるいは、別の表現で言えば、上記のような多種多様な曖昧なものに圧倒されることなく、それらを引き受けて生きることができるようになることを「曖昧なものの受容」と呼んでいます。

インテグラル理論で言うところの「統合的な意識段階」とは、そうした曖昧なものを認識し、それらを咀嚼・統合することができる意識の段階だと思います。そうすることによって、私たちの意識はより成熟し、認識世界がより広く・深いものとなっていきます。そのため、「受容する」というのは、受動的な側面のみならず、新たな認識を獲得することや新たな実践を行うという能動的な側面を持っていると言えます。

こうした説明をさせていただきながら、人間存在そのものが曖昧なものであり、取り巻くリアリティそのものも曖昧なものであるということから、私たちは実にとんでもない世界に放り出されて今というこの瞬間を生きているのだなと思われました。

【回答に対して質問者の方から頂いたコメント】

AQAL(all quadrants & all levels)を自由自在に駆使したご説明は、非常に解りやすく説得的でした。

お陰さまで、「曖昧なもの」とは、現時点での認識能力では捉えきれないものであり、その「受容」とは、曖昧なものを引き受けて生きることができるようになり、さらにはそれに対する新たな認識を生み出していくことなのだ、と理解することができました。

この事態は、「存在しないものとして存在している」認識不可能な事象を、対象化・客体化し認識できるようになること、とも表現され、また、加藤さんの著作を見返してみると、「心が成長するにつれて、

視野が拡大して多くのことを認識できるようになるだけでなく、物事の深みや機微を認識できるようになってきます」(p.27)という記述に、「曖昧なものの受容」の本質がほぼ言い尽くされているようにも思われました。

つまり、以上はすべて人間の発達・成長という同じ事柄の別様の表現であり説明なのだ、というふうに自分の頭の中できれいに繋がりました。私が「曖昧なものの受容」の意味をいまひとつ理解できなかったのは、これを、「成長とは人間としての器が大きくなることだ」と同じような比喩表現として捉えていたからなのだと思います。「曖昧なものの受容」とは比喩ではなく、人間の成長・発達の本質をズバリ言い当てたものだったのですね。

それから、末尾の「曖昧な世界に放り出されている曖昧な存在」というのも、痛く共感しました。これは人間の存在論的真理と言ってもよいくらいに、人間存在の本質をついた鋭い洞察だと思います。それとともに、この事実に想いを致して、私はなんだか頭がクラクラしてしまいました。「曖昧なものの受容」が進めば、クラクラも軽減するかもしれません(笑)。でも、キリスト者としての私としては、この曖昧さに対して取るべき一つのスタンスは、「被造物としての無知であることの受容」なのではないか、などと現時点では考えています。